どうしてこんな忙しいんだろう……?

新幹線で小倉まで行く間、すっかり見慣れた景色を眺めながらYUKIはぼんやりとそう思う。

アルバム完成後、バンドはすぐに次のレコーディングにとりかかり、並行してライブもやっていた。音楽をやる毎日は刺激的だ。楽しい。

しかしYUKIの活動のなかでは、ラジオや雑誌の取材など自分たちの音楽を伝える作業のほうが圧倒的に増えていた。そのほとんどがYUKIひとりで受けるものばかりで、なのにいつもインタビューで上手にしゃべれない。バンドの音楽をちゃんと伝えることができない。

そのうえ『eZ a Go! Go!』のパーソナリティに加えて、YUKIはラジオ番組『NON STOP Radio Jam』まで持つようになっていた。

小倉にあるラジオ局、クロスFMまで新幹線でたっぷり5時間半。

移動時間もすごいが、YUKIをもっと驚かせたのはその番組が4時間にも及ぶということだった。小学生のころ姉とふたりでやっていた『サタデーナイト』とは違うのである、YUKIは頭を悩ませた。

「『NON STOP Radio Jam』、こんばんは、YUKIです」

最初の挨拶から、オンエアする曲の感想まで、トーク部分の原稿の一言一句を自分で書いた。

今まで以上にCDを聴き、アーティストの活動や近況をチェックし、自分なりの感想を織り込めるようにと普段からノートにメモをとる。

音楽に関係のない日常のささいな出来事や、東京で仕事をしている間に見かけた光景、気づいたことまでを書き留めるようになった。

やがて自分でも気づかないうちに、観察する視点が増えていく。

音楽の世界が広がっていくのがわかる。

「YUKIちゃんの好きなもので特集を組んでみる?」

「え、ホントに? トミタさん、やっていいんですか?」

番組プロデューサーやディレクターをはじめ、スタッフは皆、気のいい人たちばかりで、放送が終わるとみんなで小さな居酒屋へ出かけた。YUKIはバンドのことや音楽の話、番組には関係ないようなバカな話をたくさんした。店が閉まるまで話し込み、夜中の3時ごろホテルへ帰り、翌朝には新幹線で東京へ戻る。

週に一度の『NON STOP Radio Jam』、それが9月からずっと続いている。喉も体も疲労する。けれどもいろんなことをぐんぐん吸収していく自分のことが、YUKIは面白くてならなかった。

テレビやラジオ、雑誌のインタビュー。いろんな人に出会い、話すことで音楽を伝える——落ち込んだり、天にも昇るような気分になったりと、彼女の心は多感だった。多忙な日々はものすごい速さで過ぎていく。なのなかで、YUKIは確かに、成長していった。

「公太さぁーん。 ごめん、送ってってー!」

「またかよ~? 俺はアシじゃないんだからな。オマエらこれで電車使ったことにして、交通費を精算するんだろ?」

「当たったり——!」

スタジオでの作業がひけたあと、若者組のYUKIやTAKUYAは車で動いている五十嵐に頼み込んで、よく送ってもらっていた。

浮いた電車賃は180円とか250円。でもそれがYUKIには貴重だった。

ゆっくり休める時間もなければ、お金なんてもちろんない。

東京に出てきて最初の半年は月10万、事務所に所属するようになってお給料は20万に上がったものの、YUKIの生活はぎりぎりだ。

家賃に食事代、洋服や小物やアクセサリー、雑誌代に電車賃と、あっというまにお金は消えていく。部屋のある江古田から池袋までの車賃を浮かせるため、ママチャリで目白通りを走ったこともある。

交通費を事務所で持ってもらえるようになってからというもの、YUKIは事細かにその精算を始めた。戻ってくるお金が唯一のお小遣いみたいなものである、浮いた180円、むちゃむちゃ貴重なのだ。

「しっかしEgg-manでヘアメイクさんが付いてるなんて、初めてだな」

「メシまで用意してあるよ」

「うわー、お花が届いてるよぉーっ!」

11月25日、渋谷Egg-manの楽屋は荷物とメンバーの嬌声にあふれていた。初のワンマン、YUKIの胸は高鳴った。

イベントでのほかのバンドに対抗する気持ちや、どんなお客さんを前にしても退かない強さなら、5月から8月にかけて行ったライブで体に染み込んでいる。

けれども今日は違うのだ。自分たち以外、ほかには誰も出ない。

(みんなあたしたちだけを観に来てくれるんだ……!)

緊張なんてまったく感じない。YUKIの頭のなかは、自分をどう見せるか、どんなふうに何をしゃべるかでいっぱいだった。

(今夜はあの曲のあそこで、こんなふうに回ってみよう)

(あるMCでは、最後にこう言おう。うん、決まり。カッコイイ!)

考えていると、楽しくてしょうがない。

緊張なんてしている暇がないのである。

何より最高のイメージは<伝説のデビュー・ライブ>。チケットを手に集まったファンと詰めかけた媒体関係者で、ライブハウス扉が閉まらないほど人がいっぱいいになる——そういう伝説のライブになるといいなあ、と、うっとりした顔つきのYUKIに恩田が言った。

「……YUKIちゃん。あのね、俺たちまだ始まったばかりなんだよ。伝説もクソもないよ」

「あ、そっか。そうだった。そうだよね、あたしたち、これからだ」

このバンドの噂はすでに業界に広まっていた。イベントでつかんだファンは、YUKIたちのステージに熱狂した。会場のキャパを上回る人の数だけ、Egg-manのドアは開閉され、場内は熱気であふれ返った。

「へえー。恩ちゃん、このバンドって、出待ち、いないよ」

近くの打ち上げ会場へ行こうと外へ出ると、五十嵐と恩田が笑い会っている。ライブが終わると、外でプレゼントや手紙を持った大勢のファンが待ちかまえている——それは恩田や五十嵐にとって、ライブ後のいつもの光景だった。しかし、今夜は人っ子ひとり待っていない。

訝しそうにふたりの様子を見ているYUKIに、恩田が教えてくれた。

「誰も待ってないからって気にしなくていいんだよ。反対に、これは喜ばしいことだと僕は思う。YUKIちゃんや僕らに興味があるっていうよりも、まずJUDY AND MARYの楽曲が好きでみんなライブに来てくれてる、そういうことだと思うからね」

Egg-manの正面入り口を出て、公園通りの坂を歩き、YUKIはみんなと一緒に打ち上げ会場へ行った。出待ちのいないバンドを待っていたのは、テレビやラジオ、雑誌やレコード店の人たちだ。

「YUKIです、よろしくお願いします」

たくさんの人を紹介され、YUKIは飲み物や食事に口をつけるまもなく、数えきれないほどの挨拶をした。とにかくしゃべった。

誰に何を話したかも、もうよく覚えていない。

ライブの興奮が冷めなかった。ひとり電車に乗って帰る途中も、部屋に着いてもまだ、YUKIは得体の知れない興奮に包まれている。

(いいね、やっぱりいい。ライブがいちばんだよ!)

彼女のイメージと合致しているかどうかはべつとして、この夜のことを伝説のライブと人が呼ぶようになるまで、時間はなかなかなかった。